

日本書紀の傳來と諸本に関する一考察

榊原, 末一

<https://doi.org/10.15017/2339089>

出版情報 : 史淵. 33, pp.1-26, 1945-03-10. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

日本書紀の傳來と諸本に關する一考察

榊原末一

はしがき

我が開闢以來の歴史を記して六國史の首をなし、又中世以降に於ては神典として古事記、舊事紀と並び稱せられた日本書紀は、我が古代史及び神道研究上に不可缺の古典である事は今更云ふ迄もないが、古典を諸種の研究に利用するにあつて必要なるはその讀解である。而して本書の古寫本をみるに、既に平安朝に於て乎古止點又は假名點の附せられた跡が窺はれ、又同じ時代に朝廷に於て本書を講じた時の博士等の手記、即ち私記の現存するのを始め、中世以降の寫本及び近世板本の大部分には乎古止點或は假名點が附せられ、その註釋の如きは、神代卷に於ては特に多數に上つてゐる。然るにこれらの訓點は既に中世前期に於て數説あるを免れず、註釋に至つては、各その著者の見地に從つて頗る多岐に亘つてゐる事は勿論である。かくてこれらの訓點並に諸註を検討して、最も妥當なる本書の訓法と解釋とを考究する事は、本書を諸種の研究に利用するにあつて最も必要であるが、更に今一步を遡つて考へるに、本書は撰進以來千二百有餘年を経た今日に至る迄、或は轉寫せられ、或は板行せられて殆ど完全に傳はつてはゐるが、現存する古寫本は平安朝のものは僅に十數卷に過ぎず、全三十卷中約半數の卷々は中世以降のものゝみである、而してこれら諸本には轉寫の間に於ける魯魚烏焉の誤も少くない事は、諸本に於ける文字、語句の相違の尠くない事によ

つても窺はれる。かく考へ來れば、撰進後千年以上を経た本書を研究資料とするにあつては、先づ本文、訓點、註釋（兩者を合せて解釋と呼ぶ事も出来ると思ふ）に亘つて本書そのものを研究する必要ある事が考へられる。かゝる見解の下に、私は先づ心を本書の本文に潜めるに至つて既に數年、未だ古寫本に直接接する機會には殆ど恵まれないが、その主要なるものは多く複製本が刊行せられて解説も附せられ、又撰進千二百年紀念日本書紀古本集影・日本書紀編纂千二百年紀念展觀會目錄（京都）があり、更に國史大系・皇學叢書・朝日新聞社版六國史等に收められた本書の首には解説があり、又宮地直一博士の「中世に於ける古傳の傳來」といふ御研究等もあつて、これらによつて大略の考察を進めて來た。今これ迄に學び得た結果を聊か左に纏めて御批判を仰ぐ事とする。

註（一）史學雜誌五一の二三

一 一般古典の傳來

日本書紀の傳來を考察するに先立つて一般古典の傳來を一瞥する事とする。古典とは宮地博士に従つて記紀を中心としてそれに古語拾遺と舊事紀を加へて呼ぶ事とし、傳來といふ語は、同博士は利用研究の状態といふ意義に用ゐられたが、今私はこの語を寧ろ今日迄佚亡せずして傳はつて來た状態といふ狹義に使用した事を豫めお断りしておく。

先づ古事記に於ては、今日一般に知られた最古の寫本眞福寺本は、花山院通雅・卜部（平野）兼文・一條家・大中臣定世等の手を経て中世中期に僧賢瑜が寫した本で、これにつぐ伊勢本及び伊勢一本と稱せられてゐる本は、伊勢度會郡宇治郷尾崎遍照院所藏本を僧惠觀の手を経て沙彌道祥及び金剛佛子春瑜の寫した本である。更に之につぐ前出侯爵家藏

本は卜部（平野）兼永が家傳本を寫した本より出で、春日社家祐範が所持して、慶長年間に同人が勅本と校合した由奥書に見えて、當時勅本と稱せられる本があつた事が窺はれる。又伏原家本は各卷頭に「伏原」といふ印があつて、宣賢以來清原・船橋・伏原諸家に轉藏せられた由である。以上が中世寫本の主なるものであるが、更に近世刊本をみるに、寛永二十一年の版本は卜部家系統の本に基くと云はれ、又伊勢外宮の社家度會延佳が校訂出版した本があつて、國學勅典以前にはこの兩本が流布せられた。又註釋は中世前期に於て卜部兼文の古事記裏書の存する事は周知の事である。^(一)次に舊事紀に就ては、その書名は既に本朝書籍目錄帝紀の首に擧げられてゐるが、その古寫本は乏しい由で、寛永版本並に新訂増補國史大系本（七）に附記せられた奥書によるに、安貞二年卜部（平野）兼頼書寫の語を始め、兼文・兼方等卜部（平野）家の人々の名が見えて、終に大永年間卜部（平野）兼永書寫の語がある。新大系本に他の奥書を附記せられないのは、少くともその校合に用ゐた諸本には、他の奥書（近世のは別として）はなかつたものと考へられる。この事實は決して本書の重んぜられなかつた事を現すものではなく、寧ろ古事記よりも重んぜられた時代のある事は宮地博士も述べられた如くで、中世前期の終頃慈遍が舊事本紀玄義及び文句各十卷を著はし、これは古事記裏書の如く極めて簡略なものでない事は、この事情を物語るものと考へられる。近世刊本に就ては、古事記と同じく寛永二十一年の版本があり、卷三及び九に兼頼以下の奥書が記されて全く卜部家の本によつた事が知られ、^(二)（古事記寛永板には奥書は全くない）又延寶九年の奥書ある度會延佳の校訂本がある事も古事記と同じである。

次に古語拾遺をみるに、現存最古の寫本は嘉祿元年卜部（吉田）兼直の書寫で、その原本は左京大夫藤原長倫本で、その奥書によつて更に主神頭中原師遠本があつた事が知られ、又當時吉田家には證本と稱する本があつた事が窺は

れる。これにつゞ年代の明らかな本は曆仁元年書寫の法隆寺本で、次が元弘四年の奥書ある金澤稱名寺本で、この本は略同じ頃書寫せられた他の稱名寺本二種と共に前田侯爵家の所藏となつてゐる。尙文明寫本・明應寫本（尾張徳川侯爵家舊藏）・天文寫本等がある。刊本では舊印本・元祿四年の所謂四宮本等があり、更に寛政三年日下部勝泉の校勘本があつて群書類從に收められた。又註釋としては、天和二年龍觀近が伊勢神庫傳來の本によつて言餘抄を著はし、早く刊行せられたので、この原書と同じ系統に屬する金澤稱名寺本等を伊勢本と稱するに至り、嘉祿元年兼直書寫本より出でた四宮本・類從本等を卜部本と稱するに至つた。^(三)

終に日本書紀神代卷と不可分の關係にある類聚國史並に日本紀畧卷一・二に就て附記すれば、石清水八幡宮所藏類聚國史卷一は嘉祿三年の寫本で、清家本によつて寫した事が奥書に明記せられてゐるが、卷二は現存せざるが如く、新大系本（五）の校訂文にもその本名は見當らない。又日本紀畧卷一・二はその傳本殆どなく、奈良興福寺一乘院の傳本は、嘉元四年劍阿書寫の日本書紀卷一・二と全く同系統本で、その奥書をやがて巻尾に記してゐる。^(四)

之を要するに、中世に於ける古典の傳來は、前期に於ては神道家に負ふ所極めて多く、その終頃より後期にかけては、これ亦神道研究家であつた佛者の手に移つた事は、既に宮地博士も述べられた如くであるが、その間にあつて、卜部家の人々が始終縷まざる努力を續けて來た事が、現存諸本に残る奥書によつても（これは一は同家の人々は、その手を經た本に好んで奥書を加へた事にもよると思はれるが）、充分に窺はれると思ふ。

註（一） 古典保存會複製眞福寺本・伊勢本・春瓊本・猪熊氏藏本各古事記及び神宮文庫本古事記裏書、並に尊經閣叢刊前田本古事記の各解説、新大系（七）凡例による。

(二) 宮地博士及び新大系凡例による。

(三) 岩波文庫本古語拾遺概説並に異本及び註釋書、尊經閣叢刊元弘本古語拾遺解説、神典解説解題、古語拾遺の異本及び註釋書(神道叢書二)による。

(四) 新大系(五・十)凡例、朝日新聞社版六國史日本書紀解説による。

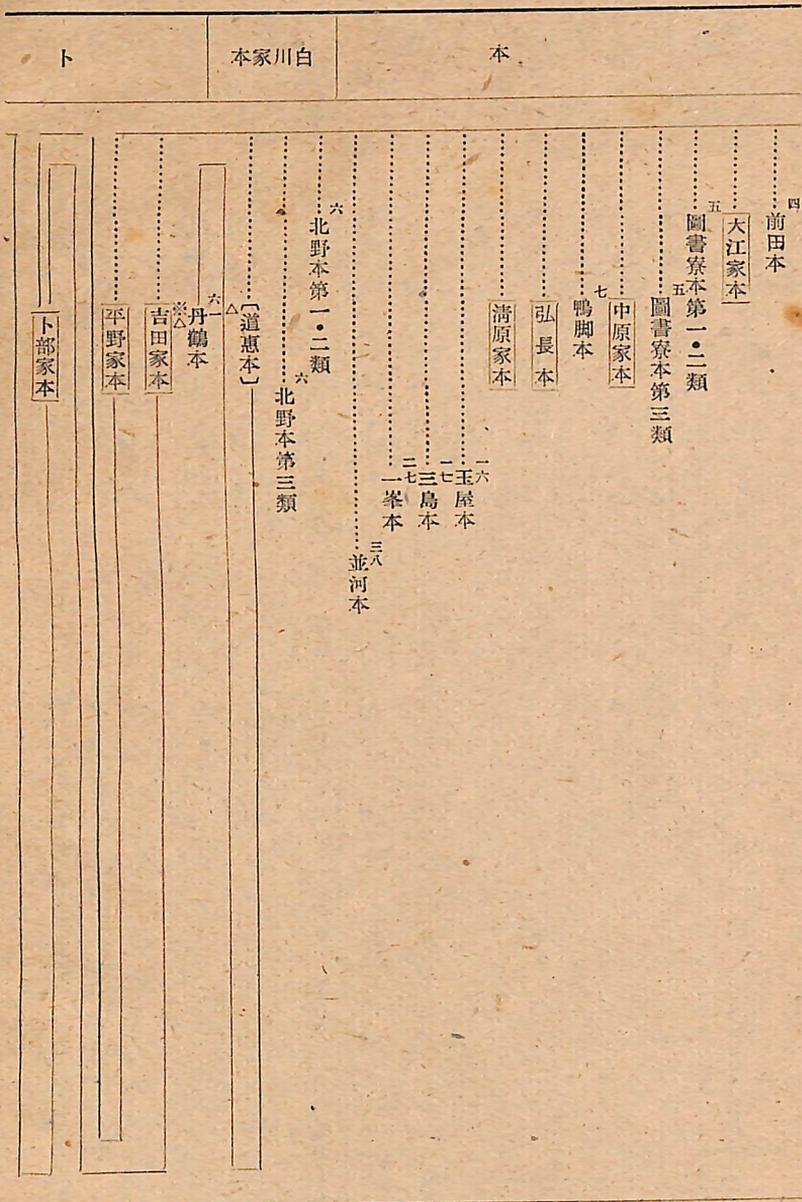
二 現存諸本とその傳來の概観

かくて日本書紀に立返つて考へるに、本書は他の古典と異なつて平安朝の古寫本も現存する事は上述の如くであるが、又中世に至つても、その時代の古寫本の現存する數に於て、到底他の古典の比ではなかつた。これは本書が勅撰六國史の首として、如何なる時代にあつても特に重んぜられた事を物語るものであると思はれるが、今現存する古寫本は勿論、これら諸本を始め近世校合本等に殘る奥書によつて、本書の書寫傳來せられた跡を尋ね、之を表示すれば大略次の如くである。

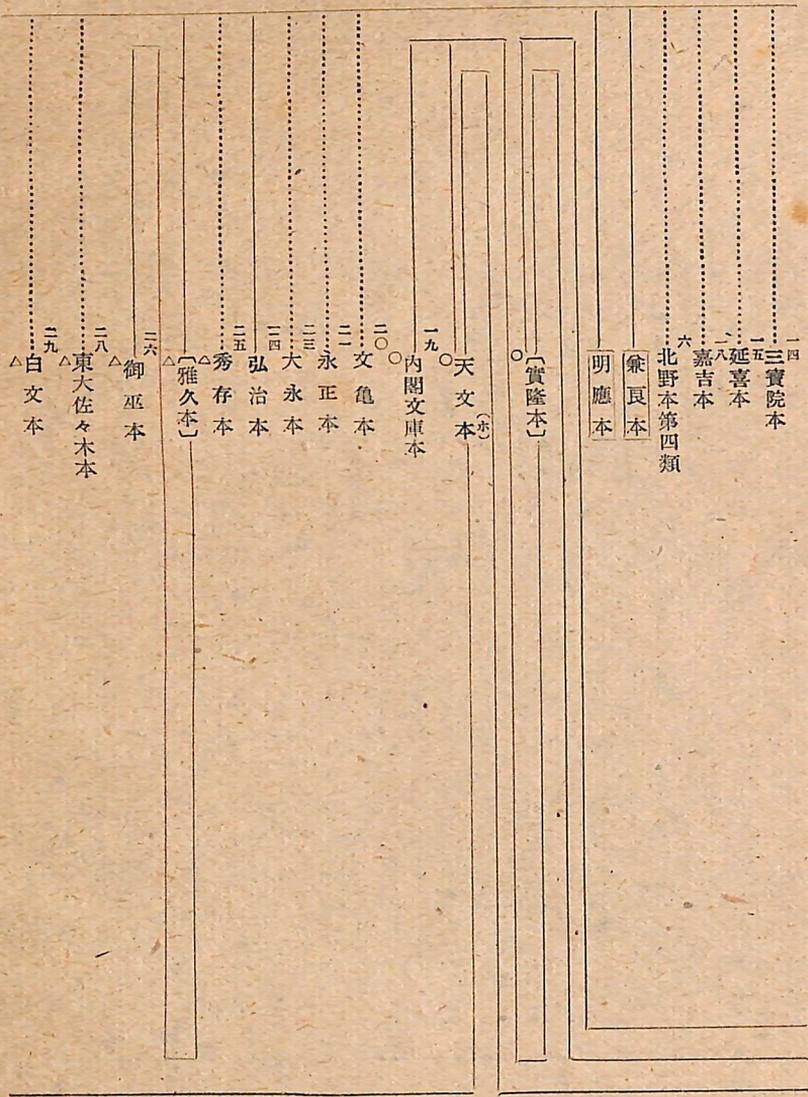
日本書紀諸本傳來略系統表

古	系	奈	平	中	中	中	近
	統	朝	朝	前期	中期	後期	世
	時	良	安	世	世	世	
	代						
	一、二、三 佐々木・猪熊・田中本 岩崎本						
	日本書紀の傳來と諸本に關する一考察						
	五						

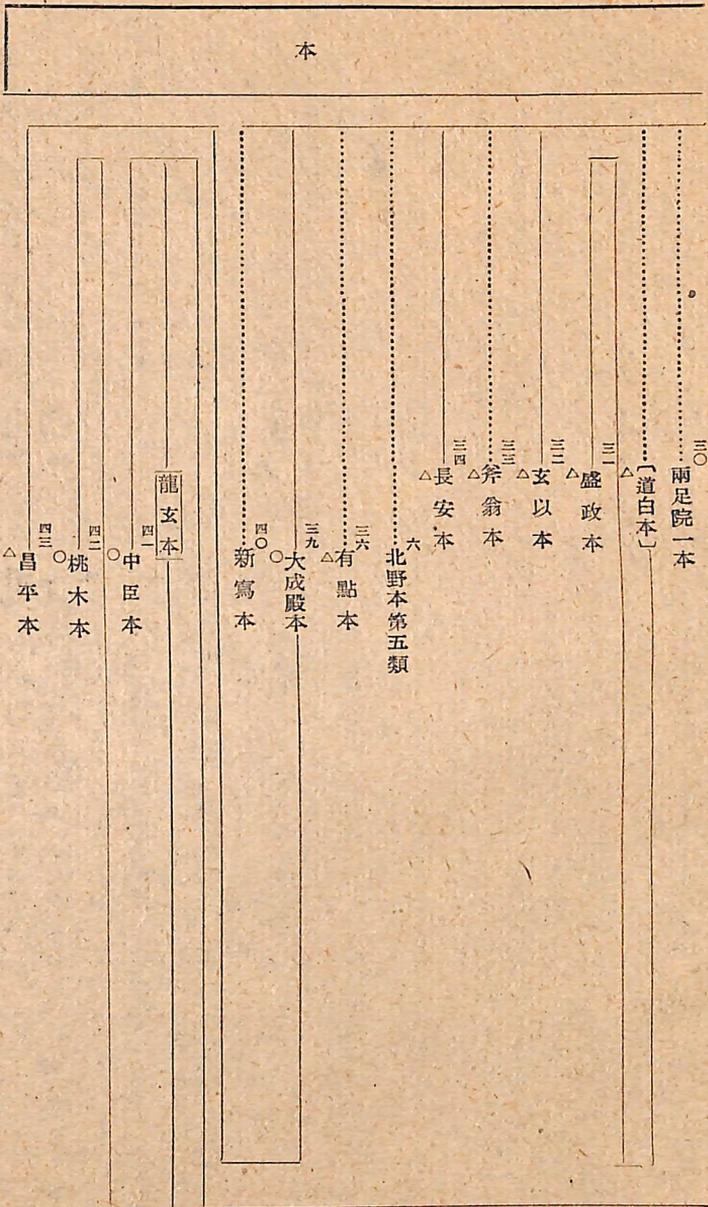
日本書紀の傳來と諸本に關する一考察



家



本



備考

(一) 本表は極めて概畧を示したもので、尙不審の點も少くない上煩雜に亘ることを避けたので、主要なるものゝ外省畧したも
 のも少くない。

日本書紀の傳來と諸本に關する一考察

は圖書寮本卷廿三の奥書(C)に依つて、既に平安朝に存した事が知られ、早く卜部家本にも取入れられて、その訓點は同家の所謂「家本點」に對して「江家本點」として、現存寫本は勿論流布板本にも傳へられてゐる。圖書寮本第三類はその年代は明らかに難いが同本第一・二類よりは稍降るものとして假に中世前期に置いた。中原家本及び清原家本は、その確實な年代に於ては、前者は伊勢本卷四、後者は全本卷廿三以下の奥書に見える元久三年及び永仁五年であるが、恐らく平安朝に遡つて存したのではないかと思はれるが、今は暫らく中世前期とした。次に應永本卷四の奥書によつて、元久三年卜部(吉田)兼直が本書を書寫し、又全本卷廿六等の安貞二年卜部(平野)兼頼の奥書によつて、當時同家には既に本書が存した事が知られるが、この兩家の本と所謂卜部家累家本との關係に就ては後に詳述する。(第五節)圖書寮本第四類はその形式より見て卜部家本の系統に屬するが如く、その奥書によつて中世中期とした。次に伊勢本は最も疑問の多い本で、その直接の原本は興光寺本と思はれるが、それが更に尾崎遍照院祐徧本に遡る事は、奥書には卷四に祐徧の名の存するのみで他に一つも見えず、又卷三の如きは三河國鳳來寺村本坊住僧の本を道祥が直接寫した如くで、又卷六・廿六も共に他本に據つたやうに思はれるが、今は多きに依つて嘉曆本より祐徧本・興光寺本を経て道祥等が書寫したものと推定した。又卷三・廿六・廿七の奥書は道祥・春瑜兩本のあつた事を豫想せしめ、特に古事記上卷はこの兩人の書寫本が共に現存してゐるので、(第一節)益その感を深くする。尙この本の卷一・二に就ては、古典保存會刊伊勢本古事記の解説に於て、橋本進吉博士は、道祥が「興光寺當住之御本」を以て書寫した日本書紀卷一・二を伊勢菴田守理氏が藏せられ、それには又僧惠觀が祐徧本を以て書寫した由の奥書があると述べられてゐるが、これが即ち伊勢本卷一・二で、朝日新聞社版六國史凡例に菴田本とあるのはこの本の事と考へられるから、

今伊勢本の前にこの本を擧げた。更に古本集影四九寛文七年版本の書入によれば、惠觀本を春瑜も書寫した如くである。次に内閣文庫本の原本たる實隆本の系統も複雑で、伊勢本の原本たる嘉曆寫本にはよらず、その原本に更に建武・曆應年間に移點校合を加へた本によつて、卜部（平野）兼員が康永年間に書寫した本を直接の原本とする如くであるが、神代卷のみは明らかに乾元本（古本集影九）により、而も卜部（吉田）兼俱の奥書をも存してゐる。又天文本は桃木本（古本集影四二）卷三十に存する天文九年卜部（吉田）兼右の奥書によるに、所謂卜部家累家本との直接の關係はない如くである。終に龍玄（梵舜）本に就ては、吉澤氏が既に述べられたが、桃木本はこの本を原本とするが如く、又赤塚芸菴が慶長活字版（古本集影四七）の校合に用ゐたのも、その神代卷ではないかと思はれる。

かくて本書は他の古典に見ざる平安朝の古寫本が現存してゐるが、一度中世に入れば卜部家系統の本が他を壓して流布した事は、本表を一見すれば明瞭である。而かも一般古典と同様、中世初期に於ては神道家たる白川、卜部兩家の手を経て、その終頃より後期にかけて佛者の間にも傳はつて行つた事が見られる。而してかく本書の研究が神道家の手に移ると共に、本書卷一・二たる神代卷上下のみを抽出して書寫し、又本書書寫をはじめ、校合移點の經過を記して奥書とする風習が起つた。この事は宮地博士が既に述べられた所であるが、平安朝に於ても本書の神代卷を重んずる風習が全くなかつたとは考へられず、かの日本紀畧は暫らく措き、類聚國史卷一・二が本書卷一・二をその儘採録して神祇部一・二とした如き例もあり、又奥書も平安朝終頃の本書に一例は存してゐる。併しそれは中世に入つての如き甚だしきものでなかつた事は勿論で、秘說秘本など稱する語は存したとは考へられない。然るに古典の傳來が神道家の手に移つた、といふよりは寧ろ、神道家が神道研究のため盛に古典を書寫するに至つて、自らその研究の結果を

秘説とし、それを書入れた本を秘本と稱し、それを篤學の人に授ける風習が既に中世前期には起つて、その研究の過程並に傳授の由來を記して奥書とするに至つたものと思はれる。而して神道家が神道研究のために常に利用したのは神代卷を主とし、又篤學の人として秘説を授けられたのは、神道家の外は神道研究家たる佛者が多かつたものと思はれる。(二)かくの如くにして古典の傳來は次第に神道家より佛者の手に移り、本書全三十卷の寫本より神代上下二卷のみの寫本が多くなつたものと考へられる。かくて中世に入つては本書神代卷のみの寫本は、初期に於て現存するものゝみでも三種を數へるに比し、全三十卷の寫本は一種も現存せざるのみならず、名のみ残つてゐるものもなく、同中期に入つての康永年間の卜部兼員の寫本は奥書(古本集影一九内閣文庫本の條)によれば初は一部三十卷あつた如く、又後期に入つての應永年間書寫の伊勢本は全三十卷書寫した事が奥書に依つて知られるがこれも散佚し、全期の永正年間の三條西實隆本亦所在不明で、それによつて寫したと思はれる内閣文庫本は年代明らかならず、吉田子爵家の秘庫に存する天文本のみ明らかに中世後期の寫本で、他は何れも近世に入つてのものゝみの如くである。

かくの如く本書は他の古典よりも特に重んぜられた如く、古寫本並に註釋書の多く現存するにも拘らず、完備した寫本が却つて他の古典よりも乏しいのは、その浩漭なるためとは云ひ乍ら、誠に寂寥の感なきを得ない。

次に註釋書に就ては、平安朝の私記の零本の現存するものあるは暫らく措き、既に中世前期に於ても卜部兼方が全卷に亘つて施した釋日本紀二十八卷は完全に現存し、同中期には神道家たる忌部正通は神代卷口訣を著し、同じ頃又は同後期にかけて佛者の手になつたと思はれる私見聞及び私鈔があり、ついで一條兼良は(神代卷)纂疏の名著を作り、又卜部神道の大成者吉田兼俱の子清原宣賢は、神代抄を著して家の説を祖述する等、中世のみでも五指を屈す

るに餘る程で、本書が如何に重んぜられたか、充分に窺はれる。

註(一) 諸本の奥書で古本集影に據つたものは以下一々註記しない。

(二) 鎌倉本(古本集影一〇)奥書参照

三 古本の觀察

平安朝の古寫本を始め、近世の寫本に於ても白川・卜部兩家本の何れの系統にも屬せしめ難い本は、特殊研究家の手を経ないため比較的原形を保つてゐると考へて、それらの本を一括して今假にかく呼ぶ事とした。朝日新聞社版六國史解説(佐伯有義氏)及び北野本解説(宮地博士)によれば、平安朝古寫本と白川家本の系統である北野本・丹鶴本以外は、何れも卜部家本の系統に屬する由であるが、神代卷一書を細註にした形式の本はその系統に入れる事は困難で、又白川家本の系統にも入れ難いと思はれるから暫らくこゝに入れた。

先づ現存する平安朝古寫本に就てみるに、圖書寮本は明らかに後の補足又は混入で第四類とした卷二の外は、書寫の年代に多少の隔りはあつても本來一部をなしたもので、他の同時代の寫本と共に、初は恐らく完本ではなかつたかと思はれる。その中卷十のみは訓點全くなく、これも後の補足又は混入なるかの疑がある。(吉澤氏の説)又この本の卷廿三に存する奥書は、平安朝の年代を明記した唯一のもので、當時よりかゝる風習が次第に起つた事が窺はれるが、この時代の本書の奥書は、現存古寫本は勿論、傳寫本にも他に全く存しないやうである。

次に中世に入つて、前期に屬する鴨脚本は、後期に屬する玉屋本以下三種と共に、神代卷一書を細字にしてゐるか

ら、恐らく卜部家本系統以外の本によつて寫したものと思はれる。而して鴨脚本を除き、何れも卷三以下の卷をも含んでゐるが、鴨脚本が神代卷上下のみの寫本の零本か、或は其他の卷をも含んだ數卷乃至全三十卷の零本かは知る由もないが、その書寫の年代及び形式よりみて、恐らく最初より神代卷のみ寫したものでなく、少くとも數卷は存した本の零本ではないかと考られへる。唯近世の並河本も古本集影には、書を細註にしてゐる由見えてゐるが、この本は神代卷を含まず、卷三以下は近世板本も一書を細註にしてゐるから種々疑はあるが、今は暫らく卜部家本の系統の外に置いた。

次に現存せずして名のみ残つてゐる本についてみるに、大江家は勿論、中原・清原兩家も古くより學問の家として聞えてゐるから、この兩本も恐らく平安朝より存したのではないかと考られへるが、今は上に述べた如く確かな年代によつて中世前期に入れた。又弘長本に就ては、中臣本（古本集影四一）に存する奥書によつて加へたが、この本は禁裏御本として天文年間卜部兼右が校合に用ゐた由記し、その卷三は治道院（三條西實隆）眞筆と云ひ、卷六は蓮致御筆と記してゐるが、卷四・五及び七以下には弘長の年號があつて、兎に角弘長本の存した事が窺はれ、その系統に就ては全く明らかにし難いので暫らくこゝに入れた。

これを要するに、比較的後人の手の加らないと思はれるこの系統に属する本のみを以て、本書全三十卷の完本を作る事の出来ない事は誠に遺憾であるが、更に禱つて思ふに、古來學問の家である大江・中原・清原諸家に於ては、平安朝より中世初頭にかけて各本書を所藏し、大江家の如きはその家本に訓點をも附してゐた事が窺はれ、これら諸本は、本書卷一より出でた類聚國史卷一、石清水八幡宮所藏本が清原家本の寫である外、直接その面影に接する事は出来な

いが、中原・清原兩家本は、夙に卜部家本の書寫校合に用ゐられた事が伊勢本（古本集影二三）・中臣本（同四一）の奥書によつて知られ、又大江家本の訓點は早く卜部家本に取入れられた如く、その系統に屬する寫本は勿論、流布の板本にもその點が附せられて、その命脈を保つてゐる。又現存前田本は關白藤原教通の本と稱せられ、岩崎本は早くより一條家の藏本であつた如く、（吉澤氏の説）又同家には當時殆ど他に藏しなかつた古事記中卷があつた事が眞福寺本奥書に見えて、平安朝以後貴族の間にあつても、本書を始め古典を所藏研究した事が知られる。

註（一） 一條家の本書研究に關しては第五節に詳述する。

四 白川家本の特質

北野神社所藏の兼永の奥書ある本と、丹鶴叢書に收めて摸刻せられた劍阿書寫の神代卷上下は、共に白川神祇伯家の奥書があつて、一般に流布してゐる卜部家本とはその系統を異にしてゐるので白川家本と稱せられてゐる。

北野本は卜部家本の系統に屬する兼永自筆本及び近世の寫本を除いても、平安朝の寫本九卷と中世中期の寫本十五卷とを擁し、而も卷一を除く他卷には、流布の卜部家本とは異なる點が附せられてゐる事は、誠に一偉觀であるが、神道家の特に研究に力を注いだ神代卷に於ては、卷上は訓點奥書共になく、卷下は全く存しないので、今は神代卷上下共備はつて確かなる奥書を存し、年代も北野本よりは稍古いと思はれる丹鶴本によつて、この系統の本の特質を考察する事とする。

丹鶴叢書本の原本は今所在不明で、摸刻本によつてその面影を窺ふより外ないが、この本には正安三年及び嘉元二

年の奥書があり、それによれば當時既に白川家には「累家之秘説」を註した「當家秘本」が存した事が知られる。その秘説が如何なる點に存したかは今急に分明し難いが、流布本たる卜部家本と異なる點の少くないのは勿論で、又その形式は、神代卷一書の文を本書の文と同大の字で記し、本文より一字下げにした卜部家本の形式と異なつて、一見古式の如くであるが、尙よく見るに、この本が一書の文を一界中に二行記してゐる點は卜部家本の形式と異なつても、一書の文を本書の文の下に直に細註にしてゐるのは、卷上の一書の文の極めて短かい所のみで、その後は一書の文は本書とは行を改めて一字下げとし、又一書毎に行を改めて、「一書曰」の「一」字のみは一書の文よりも少し高く書き始めてゐる。これは斷簡乍ら平安朝古寫本卷一（古本集影一）及び鴨脚本卷二（同七）の、一書は總べて本書の下に細註とし、又一書の文が終ればその下に本書の文を連ねて、全く改行しない形式に比して、決して原形でない事が知られる。即ち一書細字別行式とも云ふべき特異の形式で、かゝる古本の形式と卜部家本の形式との中間の形式がある事は、一書大字一字下げ式の發達を卜部家の手に歸した從來の見解に、再考の餘地を與へるものである。勿論かゝる形式的な改變を加へて特に秘本と稱したものは考へ難く、秘本と稱する所以はその訓點にあるものと思はれるが、秘本と稱する本は、形式に於ても原形にある改變を加へてゐる事は注意すべき事で、かく原形を改めた理由に就ては、この形式が原形と卜部家本の形式との中間の形式であるため、第五節に於て併せ考察する事とする。又北野本の奥書は、この本に名のあらはれた資通王の子資繼王の筆の如くで、（北野本解説）この本に於ては卷一は形式に於ては一書を總べて本書の下に分註とした古形である。

尙この白川家本の系統に属する本は、本書卷一・二をその儘採つた日本紀略卷一・二として、丹鶴本と全く同一の奥

書を有する本が奈良興福寺一乘院に存した外、(朝日新聞社版六國史解説、新大系十凡例)他に存するを聞かない。

五 卜部家本の發達とその弘通

次に少くとも中世後期に於て本書傳來の中心をなした卜部家本に考察を進める。卜部家に平野・吉田の兩流が存する事は宮地博士の既に述べられた所であるが、本書の奥書に卜部家の人の名があらはれたのは、今日迄の管見の及ぶ所では、吉田流に於ては伊勢本卷四、元久三年の兼直、平野流で年號を明記したのは全本卷廿六等に於ける安貞二年の兼頼が初めてのやうである。その後平野流の人名は、兼頼の子兼文以下兼方・兼彦・兼員等、父子相繼いで本書の奥書に現れてゐる。然るに本書のみでなく、古語拾遺現存最古の寫本にも名を残してゐる兼直の子孫の名は殆ど現れず、系圖によれば兼直の曾孫に當る兼夏に至つて再び本書の奥書にその名を留めてゐる。而してこれらの多くは傳寫本に存する奥書によつてその名が知られるに過ぎないが、兼文と推定せられる花押及び兼員の署名並に兼夏の花押ある弘安本(古本集影八)と、兼夏の書寫して自ら奥書を加へた乾元本(同九)とは、共に吉田子爵家に秘藏せられて、これが現存卜部家本の最古のものと思はれる。

かくて中世前期より中期へかけての兩流の人々の研究の跡を一瞥すれば、先づ平野流に於ては、兼頼以來累代本書の移點校合に力を注ぎ、特に釋日本紀の著者兼方は清原家本と校合した事が奥書によつて知られ、又兼員は康永年間自家累代の奥書ある本を以て別に一本を書寫してゐる。(以上古本集影一九内閣文庫本の條)又吉田流に於ても、既に元久三年兼直は中原師員本を以て本書を書寫したが、(同一三伊勢本の條)乾元本はその曾孫兼夏が「累家之秘本」

を以て書寫した由奥書に見えて、同家には既に秘本があつた事が知られ、吉田流の人々も決して本書の研究を忽にしなかつた事が窺はれる。

次に後期に入つては、平野流の人々は本書の奥書よりその名を潜め、之に代つて吉田流の兼夏の子兼豊以下兼燧・兼敦等が相ついでその名を本書の奥書に留めてゐる。然るにこれら後期の吉田流の人々の奥書は、多く本書の秘説を自家の子或は篤學の入に授けた事を記して、前期に於ける平野流の人々の移點校合の事を記したものはその趣を異にし、本書の研究よりも寧ろ弘通に關する事を記してゐる。故に卜部家の本書に關する研究は、中世中期頃を以て一應完了したかの觀がある。こゝに於て私は卜部家本の弘通に關して述べるに先立つて、卜部家本の特徴とする神代卷一書大字一字下げ式の發達と、後期の奥書によく現れる所謂卜部家累家本、又は卜氏秘本といふものゝ性質に就て一考する事とする。

先づ神代卷一書大字一字下げ式に就ては、その起源を自家神道の鼻祖兼延に託する吉田家の説は暫らく措き、現存する卜部家本系統の最古の寫本弘安本及び乾元本は既にこの形式で、共に神代卷上下のみ存する。而してこれと併せ考ふべきは前節に於て述べた白川家本系統の一書細字別行式で、これも神代卷上下のみ存する。この三本は書寫の年代より云へば弘安本最も古く、乾元本之に次ぎて約十五年後れ、白川家本は嘉元四年の書寫で更に三年後れてゐるが、その原本には正安三年の奥書があつて乾元本よりは稍古い事が知られる。これは勿論かゝる形式の本の存した確實な年代で、この時かゝる形式の本が發生したのではなく、その發生はこれらの年代より遡る事は云ふ迄もない。而してその形式に於ては、白川家本の一書細字別行式は、古本の一書細註式より卜部家本の一書大字一字下げ式に至る中間に

位するものゝ如くである。故にこれに就ては、(一)古本の形式より白川家本の形式を経て卜部家本の形式となつたとする見解、(二)何れか一方は他の刺戟を受けて起つたとする見解、(三)全く無關係に發達したと見る見解、の三つの見解があり得ると思はれるが、(一)は一見甚だ自然の如くであるが、兩者は訓點等も異なる全く別系統の本であるから、この見解は容易に取り難いと思はれる。(二)の見解は、その全く別系統の本であるがために、却つて可能性が多いやうにも思はれるが、更に翻つて白川・卜部兩家に於て、何故にかく本書の原形を改めて而も多少異なる形式の本が、略時代を同じくして發生したかを考へるに、この兩家は共に神道家で、又これらの本は本書全三十卷中に含まれる卷一・二ではなく、初よりこの二卷のみを抽出して書寫した本で、これは宮地博士も述べられた如く、神道家に於ては、本書神代卷上下を神道の經典として重視したゝめであつた。而して卜部家本は元より、白川家本に於ても朱墨を以て訓點を附し、文字の意義反切を註する等、本書を常に座右に置いて利用研究した跡が窺はれる。然るに本書古本の形式は、上述の如く一書は悉く本書の下に分註にし、その註が終ればその下に直に本文を大字を以て記し、始終利用するには極めて不便なるのみならず、特に神代卷に於ては全卷の過半を占める一書を細註にすれば、行間が甚だ迫つて、訓點を附するのみならば兎に角、種々の書入をなす事は困難である。かゝる理由に依つて、神代卷のみを他卷より分離して書寫する風習と共に、原の形をも多少改めて記す事も行はれたのではないかと私は考へる。かく考へる時は、確かなる根據なくして(一)(二)の見解をとるよりも、白川・卜部兩家に於て、各研究利用に便なやうに書き始めたものとして、(三)の見解に従ふのが最も妥當ではないかと思はれる。かくて吉田家の説は、同家神道の大成者兼俱等の作爲ではないかと思はれ、特にその中「此一書ノ説ハ天上下海中ノ三境ノ神ノ記録也。己ニ勝劣存ベ

カラス。」といふが如きは、同人等の牽強附會であると考へられるが、それも同家には神代卷の一書大字一字下げ式は、卜部家に於て發達したとの傳説が古くからあつて、それを同家神道の鼻祖の所爲と云ひ倣したもので、この形式が中世前期（それより遡る事は困難と思はれる）に於て、卜部家の人の手によつて發生したとみる事は、恐らく誤でないと思はれる。

次に所謂卜部家累家本の性質に就ては、卜部家には平野・吉田の兩流があり、平野流の人々は中世前期に於て研究に關する奥書を多く本書に残し、吉田流の人々は同後期に於てその弘通に關する奥書を多く本書に留めてゐる事を上に述べたが、然らばその平野流の人々の研究した本書と、吉田流の人々の弘通した本書とは如何なる關係にあるかが問題となる。然るに平野流の累代研究の結果は、この中期頃より次第に吉田流にも傳はつた如く、弘安本も初は平野家にあつた如くで、兼文の花押及び兼員の署名ある奥書があるが、その次には兼夏の花押ある奥書があり、以後は皆吉田家の人々の花押又は署名ある奥書のみであるから、この本は兼員、兼夏の頃平野流より吉田流に傳はつたものと思はれる。又三條西實隆が書寫した本は、康永本兼員の奥書があつて乾元本の神代卷に依り、（以上古本集影一九内閣文庫本の條）吉田家にあつた「累代之秘本」を以て書寫した由天文本卷三十卜部兼右の奥書（同四二桃木本の條）に見えてゐるから、當時康永本も（その原本でなく内容が）既に吉田家に傳はつてゐた事が知られる。かくてこの實隆が書寫した當時の卜部家累代の秘本は、中世前期に於ける同家研究の結果に、更に同期に於ける平野流累代努力の成果をも取入れて、集大成したものであつた事が窺はれる。かゝる集大成が何時頃行はれたかは明らかにし難いが、かの弘安本に存する兼員・兼夏兩人の奥書は共に中世中期のもので、又康永本も同期の寫本で、更に平野流の人々の研

究も兼員を以て一應終つた如くである點より推して、同中期か或は後期初頭に行はれたものでないかと臆測せられ、一條兼良が書寫或は校合に用ゐたト氏秘本も、この性質を具へたものでなかつたかと考へられる。かゝる意味に於ける（その後の研究は勿論別として）卜部家本が中世前期よりあつたか否かは疑問であるが、卜部家本の特徴とする神代卷一書大字一字下げ式の弘安本は初平野流に、乾元本は吉田流に存した如く、この形式は何れか一方に於て發達して他方へ傳はつたもので、兩流の交渉は早くよりあつたのではないかと考へられ、又この系統に属する本は、平野・吉田何れの流の本から出たかは容易に明らかにし難いので、今平野・吉田兩流の研究の綜合せられた卜部家本が中世前期に既に存したものと假定し、又卜部家本の系統に属する本は、すべてその本源をこの本に發するものとして、第二節の表には示した。

終にこの卜部家本の系統に属する本の弘通の状態をみるに、既に中世前期に於て鎌倉本神代卷上下があり、僧曇春の筆で、丹鶴本の筆者劍阿(三)の奥書を有し、當時に於ける佛者の神道研究の態度が窺はれると共に、この系統（神代卷一書大字一字下げ式）の本が當時既に世に行はれた事を物語るが如く、ついで中期に入つて北畠親房の奥書ある神代卷下があり、これも初より神代卷のみの寫本ではなかつたかと思はれる。又熱田本は佛者の手に、章尙本は神道家の手によつて書寫せられ、現存はしな^いが祐備本・興光寺本は共に佛者の手になつてこの期のものと思はれる。後期に入つては一々枚舉に違はないが、當初より神代卷のみのものが多く、その初頭にあらはれた伊勢本は亦佛者の手になつて、三十卷完備してゐた事が奥書によつて知られる。（古本集影一三）實隆本は卜部家秘本の面目を傳へて近世に至り、流布板の原本となつたが現存せず、内閣文庫本によつてその面影を窺ひ得るに止まり、卜部家累家本は一度紛失

しても、卜部兼右の努力の結果、實隆本並に一條家本によつて略その面目を復し、天文本として今尙吉田子爵家の秘庫に藏せられるものと思はれる。又近世に入つては、元祿四年徳川光圀が卜部家本によつて本書三十卷を書寫し、群書を參考して上層に評論を加へ、その由奥書して、昌平坂大成殿文庫に納めた事は注目に値する。

次に傳授に就ては、之を自家の子に傳ふるものは弘安本・乾元本等の奥書に見え、之を他人に傳ふる例としては、慶長己亥卜部（古田）兼見の奥書ある亥以本、（古本集影三二）慶長己酉同人の奥書ある長安本（同三四）等がある。

尙こゝに一言附記すべきは一條家歴代の本書研究と卜部家の關係である。兼良の奥書ある岩崎本は、早くより同家に藏せられたものと思はれ、（吉澤氏の説）又同家には中世前期に於て殆ど他に存しなかつた古事記中卷があつたことは、既に第三節に述べた如くで、それによつても同家の好學の風が窺はれるが、更に實經及びその子家經が卜部兼

方の教を受けた事は周知の事である。^{（四）}然るに中世後期に入つて家經の後裔にあたる經嗣は、應永四年卜部（吉田）兼

灑より本書一部三十卷に關する同家の秘説を授けられ、同二十五年その説を子兼良に傳へてゐる。而して一條家本には、その旨を記した應永四年兼灑 同二十五年兼良の奥書があつて、（古本集影四一中臣本の條）當時傳授を如何に重んじたか窺はれる。然るに當時の一條家本の現存するものは僅に二卷で、兼灑等の奥書は全く見られないが、この本が當時全三十卷存したか否かは疑問で、天文本（古本集影四一中臣本の條）に残る一條家本の奥書によつて窺へば、兼良が自ら或は人に託して卜部家本を書寫した卷と、兼良が同家本を以て校合した卷とがあつて、前者は後者の缺本を補はんがためにしたものではないかと思はれるので、この點に關しては私は吉澤氏の説には容易に従ひ難い。而して第二節の表に兼良本としたのは即ち兼良當時の書寫本である。兼良はかくの如く纂疏の名著を残したのみならず、

卜部家の秘本を書寫し、或は之と校合して、而も「有不安者以舊本從之」或は「不善者不從之」など記して、あく迄研究的態度を失はなかつた事は誠に敬服の外なく、その自筆本及び書入本が、僅に二卷を名殘として散佚した事は、惜しみて尙餘りある事である。

さて中世、特にその後期に於ては、何故に他の系統の本は殆ど影を潜め、卜部家本の系統のみ世に弘通するに至つたかに就ては、種々の原因も存する事と思はれるから、一概には云へないが、卜部家本は、中世前期に於て平野・吉田兩流の人々が努力研究した結果を、更に綜合して出來上つた本で、研究者には勿論、單に通讀するにも甚だ便であつた事は、その一因をなすものと思はれると共に、中世後期に於ける神道家としての吉田家の地位も大なる一因をなしたものと思はれる。

註(一) 宮地治邦氏「吉田神道の發達史上に於ける一考察」(史學雜誌五四の一〇)所引西田學士の說による。

(二) 日本紀神代抄(清原宣賢著)等に見えてゐる。引用は同書によつた。

(三) 劍阿は鎌倉稱名寺二世であるが、同寺の僧侶が特に古典を研究した事は、中世初期より中期頃と思はれる古語拾遺の寫本が三種も同寺にあつた事(第一節)によつても知られる。

(四) 釋日本紀卷五卷末附記

六 近世及び現代版本の概畧

近世に入つては、慶長四年神代卷が勅板として刊行せられた。これが本書刊行の嚆矢で、卜部家本の系統に属する本により、清原國賢の跋がある。ついで慶長十五年洛酒野子三百が本書全三十卷を活字版にて上梓し、三條西實隆本

を原とした。こゝに於て本書流布の主流は寫本より板本に移つたが、尙卜部家本がその地位を占めた。この兩板は訓點は附せられなかつたが、寛永頃慶長活字版を覆刻して整版とし、始めて訓點が附せられ、神代卷のみは、今少し遡つて訓點を附した覆刻整版が出たやうである。(古本集影四四慶長勅版乃至四七慶長活字版覆刻整版) ついで寛文九年版(古本集影五〇)が出て最も廣く世に行はれ、文政頃には再刻本(同六〇)も出た。この外諸種の板本又は校正本等も出たが、何れも卜部家本の系統を脱しなかつた如くである。

ついで明治に入つては、國史大系には寛文版を底本として收められ、大正四年その六國史のみを再刊した時も舊本に據り、皇學叢書所收本、古典全集所收本、朝日新聞社版六國史等、何れも寛文版を底本とする如く、唯校訂にあつては次第に廣く諸本を参照するに至つてゐるが、尙流布の主流をなす刊本は、卜部家本の系統に屬する寛文板本より脱するに至らない。

七 結 語

以上に於て私は日本書紀傳來の跡を尋ね、中世、特にその後期以降に於ては、卜部家本がその主流をなして今日に及んでゐる事を見て來たが、今その卜部家本の價值に就て聊か考察を試みて本稿の結びとする。

先づ卜部家本は既に第五節に於て明らかにした如く、神代卷に於て原書の形式を改めて、一書の文を本文と同大の字で記し、本書より一字下げにして之を區別してゐる。かく原本の形式を改める事によつて、その内容を歪曲する惧があれば、それは假令利用には便であつても、その古典としての價值は減ずる事となる。然るに近世は兎に角、この

形式が原形でない事が明らかになつた今日に至つても、本書刊行にあつてはこの形式を採るものゝ多いのは、この形式を採る事によつて殆どその内容を歪曲する惧がないからであると考へられる。

次にその本文についてみるに、之を異系統に属する古寫本、或は白川家本と比較しても、轉寫の間に於ける誤と思はれるものは少くないが、故意に歪曲したと思はれるものは見當らないやうである。

更に訓點に就てみるに、奥書によつても知られる如く、中世前期に存した主要なる本と校合し、異説をも採り容れて甚だ豊富であるが、主としてこの移點校合に従つた中世前期の平野流の人々の本書に對する態度を、亦本書の校合に預つた兼方の釋日本紀を通じて窺ふに、兼方の釋日本紀著述の態度は、かの龜卜に關する説の如き、多少（何人にもあり勝の）自家主張に過ぎる點はなかつたとは云へないが、先づ大體に於ては、博引旁證、力を唯本書の究明に致してゐると私は考へる。これはやがて兼方を中心とする平野流の人々の本書の移點校合に對する態度とみて差支ないと私は考へる。

かくて、卜部家本は、その形式に於て原の形を改めてはゐるが、それは殆どその價值を減ぜざるのみならず、却つて齟齬研究に便となり、又他本と校合して廣く異説をも取り入れた善本といふべきで、かゝる善本を完成した上、今日に至る迄よく保存傳來した卜部家累代の功績は、誠に偉大で又不滅であると私は考へる。

(終)